令和３年　２月２０日

今日のシライ中

本の翼　　白井中学校図書室から VOl.41

まだ少し先ですが、３月５日は「啓蟄」、「冬ごもりしていた虫などが活動を始める頃」です。そこで、今回は「虫」にまつわる本、２冊を紹介します。

『堤中納言物語　　日本の古典を読む９』　小学館

あれ？「つつみちゅうなごんものがたり」、これって、疑うことなく純粋にまったくもっての「古典」ではないですか！まさか、こんな平安時代あたり（成立年代、成立過程、どれもこれも不明で、一風変わった話ばかりが載っている短編集です。）の本に「虫」の話ですか？はい、あります。そのタイトルもずばり、「虫めづる姫君」。では、その一端を紹介しましょう。

あるところに、身分の高いお姫様でありながら「毛虫」が大好きな風変わりな方がいらっしゃいました。お側仕えの侍女たちも気味悪がるし、ご両親も大いに困っています。ただ、ご本人はどこ吹く風、「これが成長する様子を観察しよう。」「毛虫が思慮深そうな様子をしているのが奥ゆかしい。」とおっしゃって、「毛虫」を手のひらにのせ、飽かず見守っておられます。（よくわかりますねぇ、この気持ち。昔も今も何ら変わらぬ好奇心！）ご両親が「変な噂にでもなったら、みっともない。」と諭すのですが、「かまわないわよ噂なんか。万事の現象を推究し、その流転の成行きを確認するからこそ、個々の事象は意味をもってくるのよ！」と返す始末。あぁ、なんと、このくだりだけ見れば、２年生の国語、「科学はあなたの中にある」の一節と見間違うよう！そうです、「ロウソクの科学」の「ファラデー」が民衆を前に説いたのと同じ「本質を追究する」楽しさを、この姫君も説いているのです！そもそも、この「堤中納言物語」自体が変わっているので、面白いですよ！あっ、心配しないでください。本文、はみだしコラムももちろんありますが、現代語訳の部分だけでも楽しめますよ！

『科学のアルバム　昆虫のふしぎ　色と形のひみつ』　栗林　慧　写真/大谷　剛

この「科学のアルバム」は、美しいオールカラーの写真が魅力的なシリーズです。「虫・植物・動物・鳥・天文・地学」様々な分野で、知的好奇心をくすぐってくれる本です。えー、きっと難しいんじゃないですか？そう思ったそこのあなた！大丈夫です。そもそも、小学生でも楽しめるよう、全ての漢字にルビが振られているシリーズですから。だからといって、内容は本格的、決して子供だましの作品ではありません。たとえば、今回取り上げたこの１冊。表表紙は私の大好きな「アケビコノハ」の幼虫のアップです。擬態する蛾として、一部の人々には大変有名な「蛾」ですが、その幼虫を、表紙にする慧眼、一瞬で心を捕まえられますねぇ。さて、虫たちはあの手この手を駆使し、天敵である鳥たちに食べられまいと必死の攻防。ところが、「それでも鳥たちは虫を食べる」（本書の小見出し）のです。そこに目を付け、調査した結果、「だからこそ、虫はますますみつかりにくくなる」と結論付けられています。さぁ、この省かれた調査結果が気になりますね！ぜひ、図書室で読んでみてください！